『広島平和科学』19（1996） pp. 73－92 ISSN0386－3565
Hiroshima Peace Science 19（1996）

日中戦争期・中国「抗戦文化」の研究
――文化工作委員会の組織と活動を中心に――

小林　文男
愛媛大学
広島大学平和科学研究センター客員研究員
柴田　巌
四川連合大学出国留学予備人員培訓部

A Study on Chinese Anti-War Culture during Sino-Japanese War as Seen Through the Organization and the Activities of Cultural Maneuver Committee

Fumio KOBAYASHI
Ehime University
Affiliated Researcher, Institute for Peace Sciences,Hiroshima University
Iwao SHIBATA
Intensive Language Training Center,Sichuan Union University, China

SUMMARY

The purpose of this paper is to investigate the organization and the activities of Cultural Maneuver Committee,and to extract the Chinese culture's feature in Chongqin during the Sino-Japanese war (1937-1945).

Cultural Maneuver Committee was a government agency, organized on the political balance between the Guomintang and the Chinese Communist Party in Chongqing on October 1,1940. The leading figure was Guo Moruo, and the best-known novelists, poets, playwrights, historians, economists, educators, scientists participated in it. Especially, it is worthy of notice that Teru Hasegawa, Japanese Esperantist, was admitted to become a member.

Cultural Maneuver Committee had come into various action till it was dissolved by the Guomintang on April, 1945. In brief,the cultural and historical heritage that Cultural Maneuver Committee left in the short period were as follows.

(1) It enlightened a Chinese citizen suffering from the war damage, enhanced their patriotic spirit and anti-war mood.

(2) It unified and encouraged members, helped them to create a lot of masterpieces going down in history.

(3) It cooperated with the Chinese Communist Party in propelling the democratic movement on the last stage of the Anti-Japanese War.

〔目次〕

はじめに
I　文工会成立の経緯
II　文工会の参加者
III　民衆啓蒙活動の展開
IV　「抗戦文化」創造への取組み
V　“文化”運動から“政治”運動へ
VI　おわりに－文工会の評価をめぐって－

はじめに

1945年2月22日，当時，中国の陪都（臨時首都）であった四川省重慶において，「対時局進言」が発表された。これは日本との戦争が未だ終結していないにもかかわらず，第二次国共合作が崩壊寸前にある現状を憂えた312名の文化人によって発せられたもので，その内容は，政府（国民政府）に対し早急に各党派代表の参加する緊急会議の開催を呼び掛けるとともに，1）連合政府の樹立，2）言論・出版の自由の保障，3）政治犯の釈放等を要求したものであった。

もっとも，日中戦争の末期，中国では民主運動が高揚しており，国民党の一党独裁に反対する声は，文化人に限らず，広く世論を代表するものであった。例えば，「対時局進言」に先立って出された，中国民主同盟による「対時局宣言」（同年1月26日），重慶婦女界の「時局的主張」（同2月13日）にも，同様の主張が見られるからであった[1)]。

「対時局進言」を見た蔣介石・国民党政府中枢は驚き，激怒した。しかし，その怒りはここに盛られた内容に関してというよりも，それを発した主体と，そこに名を連ねた文化人に対してであった。「対時局進言」には，新中国の文化界で名を馳せる人々の名があるのだが，そのほとんどは，政府の軍事委員会政治部の下部組織＝文化工作委員会のメンバーとその協力者であったからである。蔣介石らは，これをもって自己の政府に所属する，いわば足下の組織の反逆と認識した。ここで「対

時局進言」に署名した主要人士の幾人かの名を掲げておく。

沈鈞儒（法学者），顧頡剛（歴史学者），茅盾，老舎（作家），喬冠華（新聞記者），盛家倫（音楽家），徐悲鴻（画家），張瑞芳（女優），孫錫綱（科学者）

実に錚々たる人々である。顧頡剛は中国古代史の再構成を図った大著『古史辨』の著者として世界的に知られた歴史学者であり，喬冠華はのちに外相・国連代表を務めた外交官である。茅盾，老舎はともに日本に多くの読者を持つ。徐悲鴻の“奔馬”の絵は，余りにも有名であろう。

重ねて言うが，彼らは上述の国民政府軍事委員会政治部文化工作委員会のメンバーとその支援・協力者であった。国民党政府が驚き，激怒したのも当然であろう。国民党中枢は急ぎこれに対抗して「文化界宣言」を起草するが，これと言った文化人の署名が集まらず，結果は惨憺たるものであった[2)]。

それだけに，政府機関でありながら，“反体制”，“左傾化”ともいうべき立場をとり，かくも多くの一流文化人を結集せしめた文化工作委員会（以下，文工会と略）とはいかなる組織であったのか，それはいつ発生し，どのような活動をしていたのか，共産党とは関係があったのか，また，なぜにこの時期，かくなる行動に出たのか，等々が問題となろう。本稿では，このことを取り上げる。

おそらくこの究明からは，抗日戦争（中国では日中戦争をこう呼ぶ）期の中国知識人の意識がいかなるものであったか，そして，それは4年後の新中国成立にどのように影響したか，がより正確に理解されるだけでなく，国共合作＝民族統一戦線の持つ矛盾，その崩壊がいかなる原因によるものであったかをも，明らかにしてくれるにちがいない。

なお，日本においてはもちろん，中国においても文工会に関する本格的な研究は皆無である[3)]。

I　文工会成立の経緯

文工会は，1938年4月1日，湖北省武漢において成立した国民政府軍事委員会政治部第三庁（以下，第三庁と略）をその前身として誕生した。

1937年12月，日本軍の侵攻によって首都南京を失った国民政府は，長江づたいに

湖北省に撤退，武昌・漢口・漢陽を含めて武漢三鎮と呼ばれた武漢に主要な行政機関を移した。そして，ここ武漢において日本の“大本営”に相当する軍事委員会が，全軍隊及び軍事学校の政治教育を担任・統括する機関として設置したのが政治部であった。政治部の代表（部長）には蔣介石直属の陳誠将軍が任命され，同じく副部長には国民党の黄琪翔，共産党の周恩来が就任している。周恩来が加わったのは，国共合作下の措置である。

政治部の構成は，総務庁を中核に三部門（庁）から成り，第一庁は軍隊内の党務，第二庁は民衆の組織化，そして第三庁は抗日・対敵宣伝が，その主要任務とされた。また，第一庁の庁長には賀衷寒，第二庁は康沢，第三庁には郭沫若が当てられた。第一，第二の庁長がいずれも藍衣社に属する国民党主流であるに比べ，第三庁のそれが郭沫若であったのは，周恩来の強い推薦と尽力によるものであった。周知のように，当時，郭沫若は共産党員でこそなかったが，文学・歴史学を専門とする左翼文化人として広く知られていた人物で，六高，九州帝大に学び，亡命時代も含めて日本滞在歴20年近くに及ぶ，中国屈指の知日家であった。

第三庁の下には，一般宣伝，芸術宣伝，対敵・国際宣伝を担当する第五，六，七の三処が置かれ，さらに各処を三科に分け，第五処は文字宣伝，口頭宣伝，印刷・発行を，第六処は演劇・音楽，映画製作，美術宣伝を，第七処は企画・日文翻訳，国際宣伝，対敵工作を，それぞれ担当した。郭沫若の回想によれば，第三庁のメンバーは名簿上で300名，児童劇団等の付属組織を加えると2000名以上に達したという[4]。日本人亡命作家鹿地亘・池田幸子夫妻も第七処顧問として参加している。

こうして，第三庁は成立直後から，反日・抗敵宣伝をはじめ，抗敵献金運動や傷病兵の慰問等の諸活動を繰り広げ，武漢における抗日気分の高揚に大きく貢献した。

しかし，第三庁は短命であった。その原因は，第一に1938年6月に始まる日本軍の武漢攻略戦によって国民政府はまたもや奥地への移動を余儀なくされたこと，第二は組織編成の3処9科から4科への縮小，度重なるメンバーに対する国民党当局の不当な干渉と妨害（例えば，国民党への入党の強要）等が相次いだからであった。さらに政府の重慶遷都後の1940年8月，陳誠部長が更迭され第6戦区へ転出したのを機に，第三庁の改組が行われることになり，周恩来の副部長解任と郭沫若の降格が決定されたからである。要するに，第三庁から非国民党勢力を排除する，これが

国民党主流の狙いであった。

周恩来らが国共合作の理念を盾に，これに猛反発したのは当然であった。100名余のメンバーが第三庁を集団辞職したのも，それを窺わせる。周恩来は新部長張治中将軍に対して事態収拾を要求し，もし容れられぬ場合は辞職者を共産党の根拠地・延安へ送ると主張，事態の思わぬ展開に驚いた張治中は，自己の判断で以下の収拾策を提示し，周恩来の理解を求めた[5]。

1）第三庁の機能は別の形で存続させる，2）メンバーの党籍は問わない，3）退職者が復帰するならば，元の待遇を保証する，4）郭沫若は新組織の責任者（主任委員）とし，身分上の降格はしない。

周恩来はこれに同意し，郭沫若は1940年9月10日，新組織の組織大綱を作成する[6]。実に急転直下の改革であるが，おそらく，これについては張治中が国民党の将軍としては極めて知性的な人物であったこと，また彼が，武漢以来の第三庁の活動を高く評価していたからだと推察される[7]。新組織は，「文化工作委員会」と名付けられ，1940年10月1日に発足する[8]。

文工会の活動範囲は，1）各種文献の編纂，2）文芸の研究と普及，3）対敵工作，の三方面から成り，2）についていえば「本部直属の各文芸団体の指導と資料供与」，3）についていえば「在華日本人反戦同盟の監督指揮」を含む「一切の対敵工作の担任」が謳われていた。経費については，事務費，経常費以外に，事業費毎月2万元が支給された。

II　文工会の参加者

さて，こうして成った文工会の組織と人事は，次のようなものであった[9]。

主　　任　郭沫若（作家，歴史学者）

副 主 任　陽翰笙（劇作家），謝仁澈（1943年2月辞任），李俠公（翻訳家，謝仁澈の後任）

専任委員　茅盾（作家），沈志遠（経済学者），杜国庠（哲学者），田漢（劇作家），洪深（劇作家），鄭伯奇（劇作家），尹伯休（作家），翦伯賛（歴史学者），胡風（作家），姚蓬子（作家）

兼任委員　老舎（作家），陶行知（教育家），張志譲（法学者），鄧初民(歴史学者)，王昆侖（文学者），侯外盧（歴史学者），盧于道（生物学者），馬宗融（文学者），黎東方（歴史学者），呂振羽（歴史学者）

第一組（国際問題研究）

組長　張鉄生（作家，未着任），蔡馥生（経済学者，代理），石嘯冲（社会学者）

組員　蔡馥生，葉籟士（エスペランティスト），霍応人（エスペランティスト），先錫嘉（エスペランティスト），高地（作家，翻訳家），石嘯冲，銭運鐸，翁植耘（エスペランティスト），徐歩，黄序鼐，陳世沢（1942年12月死亡）

雇員　盧逸（演劇，中途脱会），孟世昌，陳田華，鄭林曦（言語学者），馮伝祖

第二組（文芸研究）

組長　田漢，石凌鶴（劇作家，代理）

組員　石凌鶴　光未然（詩人），賀緑汀（音楽家），李広才，王琪（版画家，丁正献の後任），李可染（画家），盧鴻基（版画家），丁正献（版画家，1942年脱会），臧雲遠（詩人），龔嘯嵐（劇作家），高龍生（漫画家），万迪鶴（作家，1943年死亡），秦奉春(工芸家)，白薇（詩人，中途入会）

雇員　沈慧（詩人），柳倩（詩人），安娥（詩人），劉巍(物理学者，中途脱会)，劉子谷

第三組（敵情研究）

組長　馮乃超（詩人）

組員　廖体仁（経済学者），蔡儀（美学者），郭労為，康天順，朱喆，緑川英子（エスペランティスト），劉仁（エスペランティスト），潘念之(法学者)，史殿昭，王学瀛，徐経満

敵情収聴室

朱喆（責任者），王孝宏，周継，李嘉（詩人）

雇員　郭宝権，盧炳雄，郭敬賢

城内秘書室（天官府7号）

羅髯漁（歴史学者，責任者），朱海観（翻訳家，責任者），駱湘楼(副官)，郭培謙（ジャーナリスト，副官），王肇啓（副官），程沢民（会

計)，楽嘉煊（エスペランティスト，会計)，李平（音楽家，文書)，陸堅毅（ジャーナリスト，タイプ)

雇員　呂佩文，姜夢綺，郭美英（中途入会)

郷間秘書室（頼家橋尹家湾50号)

何成湘（責任者)，盧鴻謀（ジャーナリスト，副官)，施白蕪，荊有麟（エスペランティスト)，汪遐（出納)，梁文若（資料)，高履芳(資料)，何永賢（資料，中途脱会)，何憶嫻，裴吉英（演劇，幼稚園，中途脱会)，林健美

植字室（1944年6月廃止)

郭敬賢（責任者)，張曜

その他（所属部署不詳)

呂霞光（画家)，孫伏園（作家)，孫師毅（ジャーナリスト)，力揚（詩人)，高原(詩人)，王亜平（詩人)，楊晦（文学者)，胡仁宇，王俠夫，金樹培（秘書，中途脱会)，任秋石，王毓忠，李在田，家[illegible]（中途退会）欧陽斉修（中途退会)

ここからは，郭沫若，陽翰笙，茅盾，老舎，翦伯賛，呂振羽，田漢，洪深，葉籟士，賀緑汀等々，その後の新中国で文化建設の重責を担う文化人が輩出しており，一見して，文工会には当時の重慶文化界の逸材が集結していたことがよく分かる。文工会は，文字通りの「人材の宝庫」であったと評してよい。

さらに，文工会の擁した人材の特色として次の三つが挙げられよう。

まず，敵国日本人を正式メンバーとして採用したことである。反戦エスペランティスト＝ヴェルダ・マーヨ（エスペラントで「緑の五月」の意)，すなわち緑川英子，日本名長谷川テルがそれであり，第三庁に参加した鹿地・池田夫妻が顧問に過ぎなかったことを考えれば，これは破格の待遇といえる。これは，緑川が前に国民党中央宣伝部国際宣伝処対日科で行った，涙ながらの日本軍向け日本語放送が高く評価されたことと同時に，郭沫若等が彼女に対して格段の厚い信頼を寄せていたことを示していると考えられる。

第二に，女性文化人の参加である。第三庁が付属組織を除いて，女性の参加を一切認めなかったことは，郭沫若が証言しているとおりであるが，文工会においては，

緑川英子のほかに，白薇，高原，楊晦，陸堅毅（霍応人夫人），高履芳(歴史学者王治秋夫人)，何憶娴（翁植耘夫人），裴吉英らが正式メンバーとなり，また雇員としてではあるが沈慧，安娥（田漢夫人），盧逸（劉巍夫人），呂佩文，郭美英（映画監督潘子農夫人）も加わっている[10]。

さらに，第三庁時代には見られなかった自然科学者の参加，これが第三である。盧于道は当時，中国科学社生物研究所所長の重職にあった生物神経学の権威であり，また第二組雇員の劉巍（馬大猷）は，1940年に米国ハーバード大学で博士号を得て帰国した物理学者であり，新中国の音響学の基礎を築いた科学者として今日でも名高い人である。

このように文工会は，その規模は縮小されたとはいえ，新メンバーを加えることで，第三庁に勝るとも劣らぬ人材を，“各界”から募ることに成功しており，陽翰笙が「本会には全国の最も優秀な文化戦士が集っている。国内第一流の文化上の専門家のほとんどは本会に集中しており，本会は最も有力な文化機関と言ってよい」と語るのも，決して誇張ではない[11]。

それでは，国共合作下で成立した文工会の活動とは，いかなるものであったのか，以下，問題別に分析を加えることとする。

III　民衆啓蒙活動の展開

文工会の公的活動は，1940年12月７日，中国映画製片庁における文化人・ジャーナリスト約350名を招いた政治部主催招待宴に始まり，その後，一般市民を対象にした国際問題講座，音楽会，文芸講演会，川劇（四川省の伝統演劇）公演を立て続けに開き，活動の火蓋を切る[12]。とくに「一年来の抗戦文芸の回顧と展望」とのテーマで開かれた，第１回文芸講演会（1940年12月28日）では，老舎，茅盾をはじめとして，洪深，馬彦祥，賀緑汀，陽翰笙，史東山等の著名文化人による講演が行われ，この日，会場となった国泰大戯院（現和平電映院）には，サラリーマン，学生等1000名を超える聴衆が殺到した[13]。文工会に対する，大衆の注目度の高さを示す一例である。

しかしながら，1941年１月，第二次国共合作下，最大の国共衝突とされる「皖南

事変」が発生し，翌月，洪深が「すべて方法がない。政治，仕事，家庭，経済がかくも苦しいのであれば，死んだほうがよい」との遺書をのこして一家三人で服毒自殺（未遂）を図る[14]。さらに同年春から夏にかけて，茅盾，田漢，胡風，沈志遠，杜国庠，呂振羽，光未然，蔡馥生，賀緑汀，葉籟士等，主要メンバーが続々と共産党の援助を受けて重慶を離れ，延安，昆明，香港，東南アジア各地へ難を避けた[15]。

このように皖南事変により文工会が被った打撃は計り知れないが，注目すべきは，事変後もその活動が途絶えなかったことである。これには張治中部長の格段の庇護があったと考えられるが，ここで文工会が1941年上半期に行った活動の一部を見ておきたい。

1月19日　第1回国際問題座談会
2月10日　第二組が『新蜀報』副刊「七天文芸」創刊
3月14日　第2回国際問題座談会
4月23日　第3回国際問題講座
4月25日　演劇批評座談会
4月27日　第2回文芸講演会
5月16～19日　第1回絵画展
5月25日　第1回民間歌謡研究演唱会
6月28日　第1回映画研究会

これを見ると，事変後，重慶では多くの出版社の閉鎖，言論の統制が行われ，文化界全体が沈滞したと言われるなかで，郭沫若等は矢継ぎ早に新機軸を打ち出し，文化界をリードしていたことがよく分かる。

さて，こうした民衆啓蒙活動は，戦時下の民衆にいかなる影響を与えたのか。この点については，筆者等の知人が往時の体験を顧みて次のように証言してくれた。

「1941年から45年まで，私は重慶大学の学生でした。初め文学をやろうと思い，自分にもその才能があると思っていました。小説や詩を書いていました。しかし，当時は戦争中であり，連日連夜の日本機による空襲で食べることで精一杯で，文学の勉強どころではありませんでした。暗い毎日で，国民党のテロが横行していました。

そんな中で，文工会の講演は私に大きな希望を与えてくれました。毎週のよう

に開かれる講演や講座で私はどんなに大きな文化的刺激を与えられたか分かりません。とくに，民主主義の問題や政治情勢の分析は，実に目を見はらせるものばかりでした。私が文学を断念して政治家を志すようになったのも，あの時の文工会の活動に触れたからです」

また同時期，文工会は，早くも終戦と新中国の誕生をにらんで，文化水準の向上とそれを支える専門家の養成に着手している。例えば，研究者対象の文化講座がそれであり，ここでは以下の諸講演が挙行されている（第4回は不明）[16]。「クリスチャン将軍」の別称で知られる馮玉祥将軍は，文工会の意図に共鳴した重要な協力者の一人であった。

第1回　郭沫若「中国古代社会研究」（1941年10月7日～9日）

第2回　馮玉祥「三国」（1941年10月20日～22日）

第3回　盧于道「人類進化問題」（1941年11月19日～21日）

第4回　鄧初民「清末政治史述評」（1942年1月20日～22日）

第5回　翦伯賛「史前社会」（1942年1月25日～27日）

さらに，「霧都」の異名を有する重慶では，1941年以降，街全体に濃い霧が立ちこめ，日本軍の空爆が減少する，毎年10月から春にかけて，いわゆる「霧季公演」が実施され，1945年までの約四年間，中国演劇は空前の活況を呈したと言われるが，その中核となった中華劇芸社と中国芸術劇社はともに文工会の傘下にあった。とくに中華劇芸社（1941年10月結成）の場合，設立資金全額を文工会が拠出しており，民間団体とはいえ，実質，文工会の付属組織であった。同劇団は46年に解散されるまで，四川省各地において，郭沫若，陽翰笙，老舎，夏衍，巴金，宋之的等の作品を上演して人気を博したが，なかでも42年4月3日から二週間に渡って演じられた郭沫若作『屈原』は，抗日戦争期演劇の最高傑作とされる[17]。

加えて，陽翰笙が田漢，石凌鶴，賀緑汀，柳倩等，第二組メンバーと意欲的に取り組んだのが，京劇，漢劇，楚劇，川劇等の伝統地方劇の改革であった。1941年9月26日，文工会主催の第5回地方劇研究座談会では，川劇界きっての名役者が招かれ，いかに川劇を抗日宣伝の需要に適合させるか，川劇界を団結するかについて話し合われた。その結果，1942年春，「川劇演員協会」が成立，これを機に抗日宣伝に適した名作が量産されたと言われる[18]。

いずれにせよ，識字率がおよそ20パーセントに止まっていた当時の中国において，こうした演劇活動による民衆啓蒙の効果には計り知れないものがあったと考えられる。

Ⅳ　「抗戦文化」創造への取組み

前節で見たように，文工会の対外啓蒙活動には華々しいものがあった。そして実際，文工会の催しが多くの民衆の支持を得，好評を博したことも，すでに見たとおりである。しかし，こうした対外活動は，1942年７月15日に開催された第11回国際問題座談会を最後に姿を消す。

それはなぜか。国民党の嫌がらせと監視が再び強まったからである。しかも，文工会にとっての不幸は，文工会が営業・管理していた南林印書館（孫師毅社長，盧鴻謀事務主任，1940年設立）が無登記の科で警察の摘発を受けたことであった。南林印書館は印刷・出版社であるが，当時重慶にあったソ連大使館からの注文を請け負っていたと言われる。それまで文工会に好意的だった張治中が，この事件を契機に会の活動に不信と疑惑を抱くようになったことも，会の対外活動を著しく阻害した[19]。

このとき陽翰笙は，文工会はこのままだと解散させられる危機にあったと言い，「われわれが対外活動を止め，活動の中心を静かな研究・創作に移すならば，再び誰かの“頭痛”の種になることはなかろう」と悩む。そして，その結果，対外活動を自粛し，活動の重点を，「多くの研究，多くの学習，多くの創作，集団研究，集団学習，集団創作」に転換し，一旦，拠点を重慶市内から西へ約50キロ離れた郊外の頼家橋へ移すことを郭沫若らに諮り，決したのである[20]。要するに，文工会が城内秘書室に一部のメンバーを残し，重慶市内から撤退したのは，日本軍の爆撃を避けると同時に，国民党の監視から逃れるためであった。

こうして始まった頼家橋での活動は，大別して文芸と演劇の二部門の研究と創作が柱とされ，それぞれ“組”としてまとまって研究を続けることになった。例えば，演劇組について言えば，陽翰笙，鄭伯奇らを中心にシェイクスピア，モリエール，イプセン，チェーホフ等の西欧の演劇作品の研究が進められ，文芸組では魯迅の作品の改めての検討がなされた。胡風は魯迅の愛弟子，孫伏園は魯迅の紹興時代の学

生である。

さらに郊外事務室では，メンバーの相互啓発を目的とする文化講座，報告会，時事座談会の開催に力を入れる。ここでは胡風，侯外盧，翦伯賛，劉仁等の正式メンバーが演壇に立ったほか，陳白塵の演劇運動（1944年１月18日），鹿地亘の日本政治（同年８月７日），科学者丁鑛の精神分析学（同年10月23日）等，会外人士による講演も実施された。各講演は，極めてユニークかつ優れた見解に満ちており，会員間では，それをめぐって忌憚のない意見が交換され，互いにかなり益するところが大きかった，と陽翰笙は言う。

そして，この時期，各メンバーが集中的に作品を量産している事実は，一連の会内活動がいかに効果的であったかを物語っている。例えば，日本でも多くの読者を有する，老舎の『火葬』，『四世同堂』（第一部「惶惑」，第二部「偸生」），緑川英子『闘う中国にて』，郭沫若の代表的史書『青銅時代』，『十批判書』等の名作もこの時期に執筆されたものである。また，1942年から44年にかけて出版された著作も枚挙にいとまがないが，主要なものには，郭沫若の著名歴史劇『棠棣之花』，『屈原』，『虎符』，『孔雀胆』，『南冠草』をはじめとして，次のような作品がある。これらのうちあるものは，いまなお新鮮な意義と価値を失っていない。

陽翰笙『天国春秋』，『杜文秀』

茅盾『劫後拾遺』，『霜葉紅似二月花』

洪深『戯劇導演的初歩知識』，『戯的念詞與詩的朗誦』

翦伯賛『中国史綱』第１巻

胡風『看雲人手記』

鄧初民『中国社会史教程』

侯外盧『中国古代思想学説史』

石嘯冲『欧州反法西斯的民主運動』

臧雲遠『静黙的雪山』，『苗家月』

蔡儀『新芸術論』

潘念之『憲法論初歩』

また，各メンバーが編集に当たった代表的雑誌には，下記のようなものがある[21]。

胡風主編『七月』（1937年9月～41年9月，上海，武漢，重慶）

沈志遠編『理論與現実』(1939年5月創刊，重慶)

田漢主編『戯劇春秋』(1940年11月～42年10月，桂林)

茅盾主編『筆談』(1941年9月～41年12月，香港)

郭沫若，王亜平，李嘉，柳倩，臧雲遠共編『春草集』(1942年1月創刊，重慶)

老舎，姚蓬子共編『文壇』(1942年3月～43年4月，重慶)

石凌鶴他編『戯劇月報』(1943年1月～44年4月，重慶)

郭沫若，馮乃超，杜国庠，鄭伯奇，陽翰笙，劉仁，蔡儀，茅盾他編『中原』(1943年6月～45年10月，重慶)

洪深主編『戯劇時代』(1943年11月～44年10月，重慶)

張志譲編『憲政』(1944年1月創刊，重慶)

胡風『希望』(1945年1月～45年12月，重慶，その後上海で復刊)

郭沫若，侯外盧，老舎，翦伯賛，杜国庠，姚蓬子他編『学府』(1945年3月創刊，重慶)

以上，文工会の各メンバーが，当時，個々の持ち場で「抗戦文化」の開拓・建設に積極的に取り組んでいたことは，こうした大量かつ優れた業績を見ただけでも明らかであるが，彼らを束ねた郭沫若，陽翰笙の手腕，並びに「五四」以後の中国文化界がかつて成し遂げたことのなかった，中国文化の繁栄期を創造した個々の功績は高く評価されてしかるべきであろう。

さらに，第三庁から受け継いだ対敵活動に関しても，決してこれをおろそかにしたわけではなかった。第三組には緑川英子ほか，日本生まれ日本育ちの馮乃超（八高，京都帝大，東京帝大)，徐経満の二人に加え，緑川の夫劉仁（東京高師)，廖体仁(東京帝大)，蔡儀（東京高師，九州帝大)，康天順（早稲田大学)，朱喆（東京帝大)，潘念之（明治大学）等，日本語能力に秀でた日本留学経験者が集結しており，対敵活動を行うに万全の布陣が敷かれていたと言える。敵情情報資料の蒐集と分析の成果は，前掲『敵情研究』，『日台広播資料』に収録・発表されたが，とりわけ，香港から入手した日本の新聞・雑誌に分析を加え，編集された『敵情研究』(月2回発行，毎号5，6万字）は質量ともに充実し，延安でも権威ある印刷物として重視されたと言う[22]。

加えて，第三組の活動を特色づけるのは，鹿地亘・池田幸子夫妻に率いられた

「在華日本人民反戦同盟」との，「一体」とも言える密接な協力関係であった。反戦同盟の成り立ちと活動については，鹿地の著作『反戦同盟』をはじめ，最近刊行された『日本人民反戦同盟資料』（全12巻，別巻１，不二出版）に詳しいが，重慶にその総部が発足するのは1940年3月，同年7月に成立大会を挙行した後，鹿地は早速，同盟員を引き連れ，最初の前線工作に出動している[23]。反戦同盟とは，日本軍捕虜のうち反戦に目覚めた元日本軍兵士たちの組織で，日本軍向けの反戦活動と後方撹乱を主要任務としていた。

文工会本部と反戦同盟総部は，同じく頼家橋にあったから，当然のことながら活発かつ友好的な交流が行われ，それぞれの機関誌に相互寄稿がなされたほか，同盟の作成する反戦ビラ，各種パンフレット等は全て文工会が一手に引受け，印刷していた[24]。同盟の機関誌は『真理の闘ひ』と題され，1940年４月から41年７月まで出された。しかし，反戦同盟については，本稿の意図を超えるので，これ以上は述べない。

ただ，こうした多面的な活動を通して，文工会が各種情報を得，次第に反体制・左傾化していったことは否めない事実であり，これが冒頭に述べた「対時局進言」を発する基盤となったと思われる。

V　“文化”運動から“政治”運動へ

日中戦争の末期から新中国誕生に至る時期，中国では国民党の一党専制の廃止，民主連合政府の樹立を求めて，民主運動が高まり，多くの文化人がこの渦中に身を投じたことは，周知のとおりである。1944年11月，文工会のメンバーの一人，翦伯賛は「今は歴史を書いている時ではない。歴史を創造し，人々に書かせる時だ」と語っているが，ここには，当時の文化人の意識の所在が如実に示されている[25]。

この時期，文工会は再び新たな転機を迎える。

その第一は，規模縮小の動きである。具体的には植字室を廃止（1944年６月），「七天文芸」の停刊（同年10月）がそれであり，さらには1939年６月の発刊以来，世界70ヵ国に送付され，抗戦中国の声を世界に伝えるのに大きな役割を果たした『中国報導』（発行部数７，８千冊）をも1944年12月に停刊させている[26]。緑川英

子・劉仁夫妻が東北救亡総会へ移るのはこの頃であるが，1945年に入ると，郭沫若が「退会はよいが，入会は認めない」と明言したばかりか，現メンバーへ積極的に退会勧誘を行うことを決議している。従来，会としては，退会希望者に対して懸命に慰留に努めてきただけに，これも顕著な変化であった[27]。

こうした規模縮小に乗り出さざるを得なかった背景には，国民党当局による文化界全体への締め付けがエスカレートし，文工会においても，研究・創作活動以外の諸活動が行き詰まりを見せていたことに加えて，天井知らずの悪性インフレによって，会の財政が極度に悪化，運営そのものが困難になっていたことが考えられる[28]。

と同時に，注目すべき変化は，成立以来，周恩来の指導を受けながらも，会全体としては無党派，国民党左派人士をメンバーに加え，一貫してリベラルな立場を保持してきた文工会が，この時期，共産党へ急速に傾斜・接近するに至ったことである。1944年7月以降，郭沫若，陽翰笙，馮乃超等が，個人的に周恩来，王若飛，夏衍，柳亜子，徐冰，陳家康等と，延安の文化運動，国共関係等の問題をめぐって，頻繁に意見の交換を重ねた一方，会としても積極的に共産党側文化人を招聘し，何其芳・劉白羽との座談会（1944年７月13日），王若飛との座談会（同年７月27日），艾蕪・沙汀歓迎会（同年11月12日）を挙行している。

そして，この影響は，1945年３月，文工会が活動の三本柱として，Ⅰ農村調査研究の強化，Ⅱ文化状況，とくに民間芸術活動の調査研究の強化，Ⅲメンバーの政治教育と文化教育の強化，を掲げたことによく反映されていよう。政治教育とは，共産主義教育以外のなにものでもない。

「対時局進言」は，こうした状況下で作成されたのであり，実際，この建議者は，八路軍副参謀長等を務め，のちに毛沢東について，「国共談判」で蔣介石と渡り合った王若飛であったという。これを受けた郭沫若は，1945年２月８日にその文章をしたため，その後二週間に渡って，郭沫若を先頭に，陽翰笙，馮乃超，杜国庠，胡風，老舎等による組織的な署名集めが秘密裡に展開されたのであった[29]。

その結果，文学，言語学，心理学，歴史学，法律学，経済学，生物学，農学等の著名教授，小説家，詩人，脚本家，翻訳家，画家，漫画家，音楽家，教育者，演劇・映画の監督及び俳優，芸術家，ジャーナリスト，医師，政治活動家ほか，ありとあらゆる分野の文化人312名を網羅することに成功しており，このなかには，崔萬秋

のように国民党側とされる文化人さえ含まれている。「対時局進言」は，当時の重慶文化界の“英知”の結晶と言って過言でなく，成立以来，諸活動によって各界に幅広い人脈を築き上げてきた文工会なればこそ，これをなし得たと言うべきであろう[30]。国民党の忌諱に触れたのはこの点にほかならない。

1945年3月30日，張治中部長は文工会に対して，その理由を明らかにせぬまま，突如として解散を命じた。こうして文工会は，奇しくも第三庁成立と同じ4月1日，四年半に及ぶ活動に幕を下ろす。解散当日，翦伯賛は次のように語り，国民党への怒りを露にしている[31]。

「私には分からぬ。同じく抗戦時期，同じ部長でありながら，今日，機構の重複が認められるからといって文工会を解散することが。それなら当初，なぜ文工会を設立したのか。

私には分からぬ。文工会が第三庁に重複して，なぜ第三庁は文工会に重複しないのか。文工会を解散して，なぜ第三庁を解散しないのか」

文工会の解散を知らされた世論の憤りもまた並々ならぬものであった。解散後，郭沫若宅には連日，重慶駐在の各国大使館員，ジャーナリスト，弁護士，医者，青年等が殺到し，同月8日には，重慶の各党領袖及び文化人により，郭沫若及び文工会メンバーの慰労のための盛大なパーティーが催された[32]。当局の監視が強化されているなかでの慰問・パーティーは，まさしく「敢行」であり，それほど文工会は，各層各界の人々によって支持されていたということになる。

「対時局進言」が，その後の民主運動に具体的にいかなる影響をもたらしたか，その評価については，今後さらに検討を要する課題であるが，ただ，それが運動を刺激したこと，また，文工会の解散を機に，民主運動に携わる人々の結束が一段と強化されたことは疑い得ぬ事実である。

おわりに－文工会の評価をめぐって－

以上，文工会の理念と組織，その国共合作下の苦渋の活動を概観してきた。本考察から判明したことは，この組織は成立当初から国共両党の微妙な政治的バランスの上に置かれていた団体であっただけに，その煽りを被ること多大であった。しか

し，時々の政治情勢に合わせて，巧みに活動方針を変更し，前期（発足～1942年夏）の民衆啓蒙活動，中期（42年夏～44年夏）における研究・創作活動，後期（44年秋～45年春）の民主運動，の期間を通して，新たな文化ジャンル＝“抗戦文化”の開拓・確立という点で，比類ない大きな成果を収めたということである。

にもかかわらず，その実態と全貌は今に至るも明らかにされておらず，歴史的評価が定まっていない。これはなぜか。最後にその原因を考えつつ，本稿の結びとしたい。

原因の第一は，当事者が文工会について語ることが余りにも少なく，資料が著しく欠乏していることである。筆者らの知る限り，関係者中，まとまった記録を残しているのは陽翰笙と翁植耘のみであり，それすら1980年代に入ってから発表されたものである。郭沫若に至っては，新中国成立後，これについては全く文字に残さぬまま，世を去った。不可解なことであるが，社会主義中国の政治環境，すなわち1950年代に始まる絶えざる文化人粛清の波が，彼らをして語らしめなかったのであろう。粛清の基準の第一は，決まって「重慶にいたか否か」であった。

第二は，中国における抗日戦争研究が，長きにわたり“延安”を中心とする共産党支配地区の行動を絶対視し，重慶における営為を，それが国民党支配地区であったがゆえにことさら無視し，これに触れることをタブー視してきたことが挙げられる。あらゆる抗日戦争史・中国革命史が共産党史と同義語であることは，何よりもそのことを示している。日本側の研究に主体性のないのは，未だこのタブーから自由でないからであろう。

ともあれ，“延安”のみが中国の抗戦を支えたわけではないことは自明の理である。しかも，こと文化について言えば，延安にも増して普遍性を保持する文化を創出したのは重慶にほかならない。「重慶」を無視して抗日戦争史を語ることは出来ない。

註

1）1945年2月22日付『新華日報』。なお，「時局宣言」，「時局的主張」ともに同紙上で発表された。

2）『陽翰笙日記選』（四川文芸出版社，1985年2月），356～57頁。

3）文工会に関する日本側研究は，以下の二編のみである。

小林文男「抗日戦争期・重慶の文化運動－郭沫若・文工会の理念と行動に関する覚書き」（斎藤秋男他編『教育のなかの民族，1988年4月）。

小林文男・橋本学「重慶抗戦下の抗日文化と教育状況－文化工作委員会の活動と役割，並びに教育界の実態を中心に－」（『国立教育研究所紀要』第121集，1992年3月）。

4）郭沫若著・岡崎俊夫訳『抗日戦回想録』（中央公論社，1959年5月），42頁。

5）1959年1月7日付，張治中の郭沫若宛書信（『張治中回憶録』第2版，中国文史出版社，1993年2月，272～79頁。下記の記述は，文工会成立前後の両者の関係を知る上　で重要な資料である。

「1940年，政治部が改組された時，国民党の多くの人は貴兄を追い出すことを主張しましたが，私は一貫して反対し，その後，特別な方法，つまり別に文化工作委員会を組織し，これを貴兄に任せ，第三庁の元のメンバーを転属させることを思いついたのです。……これは私の真心でもありました。私は貴兄が率いる左翼文化人に仕事とチャンスを与えなくては，と思ったのです」

6）王錦厚等編『郭沫若佚文集』上冊（四川大学出版社，1988年11月），346～47頁。

7）前掲『郭沫若佚文集』下冊，354頁。

8）文工会の成立日を1940年11月1日とする著作が少なくない。例えば，文工会第一組に所属し，郭沫若の秘書を務めた翁植耘の「郭沫若在第三庁，文工会及其創作活動」（『抗戦時期西南的文化事業』，成都出版社，1990年12月）にも11月1日とある。しかしながら，前掲『陽翰笙日記選』によれば，文工会は毎年10月1日に成立記念式典を開催しており，これから見ても10月1日成立とするのが妥当である。

9）本名簿は，陽翰笙「回憶文化工作委員会的闘争」（『新文学資料』1984年第1期）の組織者名簿に，前掲『陽翰笙日記選』，「郭沫若在第三庁，文工会及其創作活動」，郭沫若「下郷去」（『郭沫若全集』10巻，人民文学出版社，1985年9月）を参考にして，加筆・訂正を行った。なお，市内事務所については『陽翰笙日記選』，郊外事務所については「下郷去」に詳しいが，郊外事務室には，副官室，会計室，植字室中国語・エスペラント）のほか，図書室，「七七幼稚園」（1943年設立），野菜の栽培，家畜の飼育及びそれを販売する「合作社」，「生産団」，研究会・歓迎会等を開催する「聯誼社」，「医療室」等も併設されていた。

10）前掲『抗日戦回想録』，91頁。

11）前掲『陽翰笙日記選』，171頁。

12）陽翰笙は前掲「回憶文化工作委員会的闘争」において，この招待宴の会場を抗建堂としているが，抗建堂の落成は1941年4月1日であり，陽の記憶違いであろう。

13）趙沨「我在中国的音楽生活」（『重慶文史資料』第39集，西南師範大学出版社，1993年3月）及び1940年12月29日付『新華日報』。

14）石凌鶴「関於洪深先生的『不幸』」（1941年2月7日付『新華日報』）。

15）皖南事変後，重慶にあった中国共産党の地下組織「南方局」は避難を要する文化人の名簿を作成，文工会から杜国庠，羅髯漁（陳和山），田漢，葉籟士，陽翰笙，蔡馥生（蔡家桂），郭沫若，徐歩，何成湘，石凌鶴，金樹培，光未然（張文光），楽嘉煊（楽家燦），馮乃超，潘念之，翁植耘（翁沢永），廖体仁，先錫嘉，力揚（季信）等をリスト・アップしている（『南方局領導下的重慶抗戦文芸運動』，重慶出版社，1989年2月，242頁）。その後，一部は重慶に留まるが，最終的に南方局の手引きで重慶を離れた文化人は100名余りに達したと言われる。

16) 1941年10月8日付『新華日報』によれば，文化講座は一般講演と異なり，専門性が高いことを断った上で，聴講者を50名に限定し，参加者に十分な準備と問題の提出を求めている。

17)『曉芬編著『抗日戦争時期的四川話劇運動』（四川大学出版社，1989年6月），50～54頁，及び陽翰笙「懐念摯友，名導演応雲衛」（前掲『抗戦時期西南的文化事業』所収）等参照。

18) 段明「抗戦時期川劇改革論談」（前掲『重慶文史資料』第39集），『四川通史』7巻（四川大学出版社，1994年2月），291～93頁。

19) 前掲『郭沫若佚文集』下，417～23頁。

20) 前掲『陽翰笙日記選』，49頁。

21) 文工会の設立当初からの懸案であった総合性刊行物の出版は1941年，43年と二度計画されたが，いずれも国民党側の不理解により実現しなかった。

22) 前掲「郭沫若第三庁，文工会及び其創作活動」。

23) 鹿地一行は1940年9月末に重慶を発ち，41年1月29日帰還，同月31日には文工会，第三庁により盛大な慰労パーティーが催された。このとき，重慶に残留した同盟員は，40年12月2日より毎週一回の日本軍向け放送を開始している（1940年12月3日付『新華日報』）。

24) 緑川英子は，「小猫の死」（中華全国文芸界抗敵協会主編『抗戦文芸』第9巻第4・5合併号，作家書屋，1944年9月）において，かつて反戦同盟員として重慶で活動し，鎮遠移動後に病死した森本清，新井田寿太郎（原文中では，MとSと表記）を追悼しており，その内容から，緑川が反戦同盟に深く関わっていたことを看取できる。

25) 前掲『陽翰笙日記選』，323頁。

26) ウルリッヒ・リンス著・栗栖継訳『危険な言語』（岩波書店，1975年11月），96頁。

27) 前掲『陽翰笙日記選』，338頁。

28) 日中戦争下の重慶のインフレについては，張弓・牟之先主編『国民政府重慶陪都市』（西南師範大学出版社，1993年9月）が多面的な分析に当たっており，例えば，重慶の主要商品の卸値は，1944年7月には，1937年の1645倍に上っている。

29)「対時局進言」発表後の社会的反響の大きさについては，陽翰笙が1945年2月25日の日記に，「『文化界時局進言』発表以来，連日，街のうわさになっている。多くの友人から警告を受けた。どうやら大きな災難がふりかかってきそうである」と記している。

30) 1945年4月22日付『新華日報』。

31) 1945年4月9日付『新華日報』。

32) 前掲『陽翰笙日記選』，368頁。